

# 自他同形動詞の諸問題

森 田 良 行

## 一

従来動詞の研究といえば、共時的・通時的の差はあるにせよ、文法論的にはそれぞれの活用形における文論上の機能の分析を、意味論的には特に類義の語との対比を手がかりとして語彙的な意味の分析を旨としてきた。すなわち、未然形以下の各活用形が持つ独自の文法的な意味は、その動詞が文表現の実現に当たって、あるいは修飾的機能を、あるいは文を統括して完結させる述語としての陳述機能をというように、それぞれの役割を果たす文法機能にはかならないとの判断が基本にあったからである。これは特に動詞に限るわけではなく、用言に属する語彙は程度の差こそあれ、いずれも活用現象によってこのような文法機能を担っていると言つてよいであろう。いわゆる用言語彙に伴う「文法的意味」の結果である。これまでの文法論における動詞の中心的課題は、その文法的意味の研究にあつたと言つてよい。一方、意味論における動詞研究は、もっぱら語彙として取り出された一つ一つの語

の辞書的意味の分析と記述、よくてもせいぜい文脈内における意味の分化と派生の跡づけといった、従来の国語辞典の語義記述の枠内での分析研究がせいぜいであつた。このような研究の遂行のためには、いわゆる反義の語や類義の語を比較検討し、その意味領域における重なりとずれ、ないしは対称性を些細に吟味することが作業手順の基本と考えられていた。動詞における自他の対比も同様である。たとえば「生える」は

内部から外面に伸び出て育つ。「木がー」「菌がー」「かびがー」  
とあり、「生やす」に  
〔岩波国語辞典〕第四版

（ひげ・毛・草木などを）はえるようにする。また、それらを成長させる。

とあるように、多くは針状・棒状のものの先端が異質の基底面から顔を出し、次第に上方へと伸び出てくる現象<sup>が</sup>という共通性をその語彙的意味として持っている。この意味規定の作業手順として、自動詞の場合はガ格、他動詞の場合はヲ格に立つ語彙を多く並べ

立て対比して、「木、草、こけ、根、歯、角、ひげ、毛……」と  
自他互いに語彙を共有するところから、両語の語彙的意味に差が  
ないと判断する。これに対し類義の「出る」は、もちろん遙かに  
意味領域は広いが、「生える」に近い例として「芽が出る」「葉が  
出る」「根が出る」……と「根」を除いては語彙にずれが見られ  
るところから、その語彙的意味に微妙な差があると考える。同様  
のことは対称的な位置を占める語についても言えることで、たと  
えば針状・棒状のものの根もとを基底面に挿入し立てることは  
「植える」で、「木、草、毛、活字……」など、そのものの機能  
が働くよう立てて入れ込むという意味で対義の類義語を構成して  
いる。このような語彙的意味の分析と対比は、結局のところ、そ  
れぞれの語彙レベルでの実態調査であって、たとえ用法面での特  
殊性が調査項目に加えられたとしても、意味論的には語の意味論  
(語義論)の枠を一步も出ていない。これが、これまでの語法研  
究・語義研究の実情であった。

各語の文法的意味と語彙的意味をいくら精密に究明しても、語  
の枠を超えて文ないし表現のレベルに拡大することは理論的に不  
可能である。それを可能にするには、言語現象を異なる観点から  
把握する方法論の確立が望まれる。つまり、言語表現は語の組み  
合わせを基本として行われているのであるから、それぞれの語を、  
組み合わせのパターン(文型)において占める位置としてとらえ、  
それが組み合わせ全体の表す意味(文の意味、文義)とどうかかわっ  
てくるかの関係を追究する。ここでは、それぞれの語は、単に切  
り取られた「城壁に囲われた」単語として存在するのではなく、

文全体との有機的關係において意味を持つ「全体と部分との関係  
としての」語「ないしは」語義」と位置づける。つまり、従来の  
「文法的意味や語彙の意味を担う語」との位置づけから脱皮して、  
文の意味にかかわっていく「文型中に所を得た語」との視野に立  
つ。このような観点からとえられた「語の意味」を「表現的意  
味」と名づけようと思う。

一例を挙げる。「誘う」も「待つ」も共に、A氏がB氏を誘っ  
たり待たたりする二者関係の行動である。つまり

AガBヲ誘う／待つ。

という形式においては、一見、全く差のない他動詞と普通考えら  
れている。同形式の文の述語として、両語は文法的意味に差はな  
い。違いは、一方は「ある行為をするように勧め促す」。一方は  
「望んでいる状況が実現するまでの時を期待しながら過ごす」と  
いう語彙の意味だけのようである。しかし、はたしてそうであろ  
うか。これらを「文の意味」にまで拡大して観察すると、そこに  
意外な相違点のあることに気づく。すなわち、両語の文型変換を  
通して述語動詞の表現的意味を比較するわけである。これは、動  
詞述語構文の物語り文は、述語動詞の部分に文の意味の特色が集  
約されているとの前提に立つ。

さて、「誘う」も「待つ」も他動詞で、対応自動詞を持たない  
から、自他両文型の対比と文型変換が出来ない。そこで、他動詞  
なら「れる／られる」を付けて受身表現に変えて自動表現に準ず  
る文を作ればよいとの便宜的処置を講ずる。「誘う」文なら、

(1) AハBヲ誘う。

(1') BハAニ誘われる。

とすればよい。能動的行為が主体のAがBを一方的に誘うことによつて、受動主体Bは被動作者の側に立つわけで、「誘う」行為はAの意志的行為ということになる。「誘う」がA・B二者関係の右のような意志的行為の現れという表現的意味を持つことを、(1)文型の変換対比が教える。では、「待つ」はどうか。なるほど形式的には

(2) AハBヲ待つ。

(2') BハAニ待たれる。

と変換できるが、現実には「先生は生徒に待たれた」とか「バスは客に待たれる」とは通常では言わない。つまり右の(2)(2')の変換は非文として排除されなければならない。では、どうすれば自然な日本語となるか。(「待たれる春」は自発で、表現的意味が違ふ。)

(3) AハBヲ待たせる。

(3') BハAヲ待つ。

(3'') BハAニ待たされる。

「先生は生徒を待たせた」「生徒は先生を待った」あるいは「このバスは客を待たせる」「客はバスを待つ」ならごく自然な日本語と言えよう。なぜ「せる」「待つ」の付く文型を(3')の前に立てたか。先の「誘う」文型の場合と違って、余計な「せる」の付く形を先行させる理由は一にかかつて「待つ」の表現的意味によつていふと、言つていい。ここが「誘う」との表現的意味の違いの顯著な点だが、要するに「誘う」の場合に合わせて、能動主体をAとすると、待たせることを意図的または結果的に行つた先生・バスはAで、

待たされた側(生徒・客)はBということになる。「誘う」なら(1)の他動表現となるところが、「待つ」の場合は、使役や受身の語を伴わぬそのみの形だと(3')の受け手側の表現的意味を帯びることとなる。(1)「誘う」に相当する能動者側の表現は「待たせる」と使役を伴わねばならぬわけで、その受身形(B側の表現)は「待たされる」ないしは「待たせられる」の形にしないと表現的意味が伴つてこない。全体が述語動詞「待つ」の表現的意味の変換という点で、「せる」「れる」は極めて接尾語的である。(複語尾ととらえる合理性はここにも窺える。)

さて、同じ他動詞でも「待つ」の表現的意味が「誘う」等と著しく異なることは、「待つ」そのものの語彙的意味の記述にも反映されてよい。すなわち、単に「実現するまでの時を過ごす」といった無味乾燥な解釈では、血の通わぬ骨格のみで表現的視点が留守になっている。先の表現的意味を加味して解釈を施せば、「待つ」行為は(3')に当たる文型での文義ゆえ、(3)の「待たせる」行為の結果として生ずる現象と考へなければならぬ。(3)の結果をB側から見れば(3')なのであるから。そこで、「せる」の意味に使役や誘発があるところから、同じ「待たせる」にも、待つことを命じて待たせる場合と、待たせるつもりはなかったが、(相手)が自分より先に来てしまつて、結果的に待たせてしまう場合との二種があることになる。したがつて「待つ」の意味は(3)(3')文型との関連から、*意志・無意志にかかわりなく結果としてその待ち望む事柄の実現まで時を過ごす*。その事柄の主体に待たせる意図や責任があるとは限らない」という付帯事項がその表現的意味から

推測できるわけである。

## 二

表現的意味の観点を「文の意味」の解釈に援用すると、動詞の自他の表現的意味における類似と相違とで文全体の表現意図がどのように違ってくるか、その微妙なところがわかってくる。日本語の他動詞は極めて自動詞寄りだと言われているが、それは他動詞の語彙の意味でも文法的意味でもなく、実は表現的意味についての記述ととらえるという理解がすっきりする。たとえば、

茶碗を割ってしまった／茶碗が割れてしまった

花瓶を倒してしまった／花瓶が倒れてしまった

の両文型が同じ表現意図のもとに発話されたものと断じられるのは、他動詞「割る」や「倒す」に付加された表現的意味によると考えなければならない。他動詞だから「格」の目的語を取って「その対象に対して主体がある働き掛けをする」とか、自動詞だから「「格」の主体自身の上に生ずる現象である」というのは一般論としての語彙的意味に加わる文型上の制約でしかなく、その制約が全体の「文の意味」として顕在化するか否かは、その動詞に加わる表現的意味の如何にかかっていると言っている。右の例で言えば、意図的に・故意に割ったり倒したりしたのか、それとも不注意による不随意現象なのかで表現意識は二分される。それをいわずれと決定する指標の語は、右のような短文では表れない。「わざと」/思い切って/腹立ちまぎれに/うっかり/手が滑って/地震で/カーテンが(花瓶を割ってしまった)のような指標(これを前提

詞と呼んでおく)があるか、さもなければ文章の流れとして、そのいづれかを判断する手掛かりを与える叙述が前にある場合に限られる。前者は文レベル、後者は文章ないしは連文レベルの談話として語義をとらえるわけである。このように意味把握の視野を文・連文・文章と拡大していくことにより、語彙的意味に伴うそれまで隠れていた表現的意味が、望遠鏡の倍率を上げるように、次第にはっきりと見えてくる。それによって、その語の語彙的意味に加わる意志性の有無(意志動詞・無意志動詞の差)等も判然とするわけである。

さて、自動詞文と他動詞文とが表現意図において差がなくなる場合、右の「割る」「倒す」の例でもわかるように、むしろ他動詞に表現的意味が加算されて自動詞に歩み寄る例が圧倒的に多い。

御飯を少し残してしまった／御飯が少し残ってしまった

改札を始めます／改札が始まります

ライバル意識を燃やす／ライバル意識に燃える

他のことに心を移す／他のことに心が移る

三遊間を強烈に抜く／三遊間を強烈に抜ける

病状は峠を越えた／病状は峠を越した<sup>(1)</sup>

対応自動詞に欠ける場合は、他動詞を受身形にして自動化させ、臨時に対応させる。

明日売り出す記念切手／明日売り出される記念切手

これは「(ら)れる」を付けることによって「売り出す」に表現的意味を添えている例と見られる。

他動詞の自動詞寄り現象を「表現的意味」のなせるわざとして

とらえることにより、その「意味」とは具体的に何であるかとの問いが発せられる。そこで、右のような他動詞の自動詞寄り現象の例を比較検討してみると、いずれも自動詞文は話者の目（ないしは心）に映った現象か、話者の判断や意図を超えた事象であることに気づく。つまり、その自動詞による叙述の箇所は現象文となる例がほとんどである。ということは、そのような客世界の現象に何かを持っていくことは、故意でなければ、自発現象か、話者の意に反して自ずと移行していく不随意現象か、あるいはうっかりミス、または話者の意志の管轄を超えた客世界のあるがままの姿・態度である。他動詞文をこのような表現意識の文として運用するところに表現的意味が醸成される素地があると考えられる。これは裏を返せば、右のような表現意識の叙述においては、表現的意味の力が何らかの形で形成され、自他二様の形式が納まり得る文脈となりやすい。そこで、鯨はどんな状態かという現象観察の文では、

鯨はヒゲを生やしている／鯨はヒゲが生えている。

と自他両形式が述部に立って、等価の表現的意味を背負う文を形成する。もちろん文の意味（叙述内容ではない）としては、上の他動詞文が下の自動詞文に歩み寄っていることを俟たない。

さて、右のような自他二様の形式が納まり得る文脈で、「生える／生やす」のような自他異形のペアの動詞が仮に無かったとしたらどうなるであろう。たとえば「内部から勢いよく湧いて出る」（岩波国語辞典）の意の「吹く」（噴く）では、

この干し柿は粉を吹いている／この干し柿は粉が吹いている。

激しく火を噴く／激しく火が噴く。

と、このような文脈に立つことにより表現的意味が加わって、自他両方の文型に同じ動詞が立ってしまふ。自他同形動詞を生み出す要因の一つとなっている。

### 三

とは言え、この種の自他同形動詞は、実際には数はそう多くない。<sup>(3)</sup>

(1) 子供を授かる／子供が授かる

迷いを去る／迷いが去る

身を保つ／身が保つ

手を着く／手が着く

目を閉じる／目が閉じる

危険を伴う／危険が伴う

蕾を開く／蕾が開く

水を噴き上げる／水が噴き上げる

緑青を噴く／緑青が噴く

火を噴き出す／火が噴き出す

渦を巻く／渦が巻く

川が水を増す／川の水が増す

実を結ぶ／実が結ぶ

眠気を催す／眠気が催す

勢いを盛り返す／勢いが盛り返す

動詞「終わる」の場合、「終わる／終える」と一応自他それぞれこの形式を備えている。この使い分けは他の一般動詞群と同様に

私は話を終える／話が終わる

の対応で、「をを終える」は主体「私」の行為、「がが終わる」は「話」についての現象として、はっきり使い分けがなされている。しかし、自動詞文「話が終わる」がいわゆる先に述べた<sup>2</sup>があるがままの姿<sup>3</sup>として述べる現象の文であるため、その表現的意味が他動詞文型「話を終わる」としても働きやすい。そこから「終わる」を他動詞の形式として「私」の行為にまで拡大使用し、「私は話を終える」と言うべきところまで「私は話を終わる」と「終わる」が現れる。これは自動詞の用法の<sup>4</sup>行き過ぎ<sup>5</sup>もしく<sup>6</sup>「濫用」と取ることも可能である。使用者の位相が広がれば<sup>7</sup>語形選択のゆれ<sup>8</sup>と見なさなければならぬ。

似たような例は「あく／あける」にも見られる。「口があく」は「シジミの閉じていた口があいた」のように、目に映る現象の文であるから、ヲ格の他動詞文脈を呼び込んで「シジミが口をあいた」と「くがあく」形式に転びやすい。表現的意味からすれば「くがあく」と等価の他動詞文であるが、一方において「あく／あける」の自他対応があつて、

ドアをあける／ドアがあく

と意志・非意志の分業が行われている。「私はドアをあける」と意志的他動動作には本来の他動詞「あける」が用いられているわけで、先の「シジミが口をあく」は表現的意味においてこれとは全く類を異にする語と言わなければならない。これを「あく」は自他同形動詞と処理するか、自動用法でただ格助詞「が／を」のゆれとなすかは、解釈の違いでしかない。もっとも、この自動詞の

表現的意味に引かれた他動詞形式は非意志現象が本来であるから、先の「私の話を終わる」と同様、意志的な行為にまで拡大使用して

「はい、口をあいて／」（歯科医の言葉）

と用いられれば、これは<sup>9</sup>行き過ぎ<sup>10</sup>／<sup>11</sup>濫用<sup>12</sup>（広い意味での誤用）と言えるだろう。

(2) 格助詞のゆれ現象の最たる例は「に／を」のゆれであろう。

試験をしくじる／試験にしくじる

世を背く／世に背く

駕馬をむちうつ／駕馬にむちうつ

ゆれ現象の基本は表現価に差がないとの前提であるから、たとえば「親を頼る／親に頼る」のような例では、「親に<sup>13</sup>」のほうは<sup>14</sup>親に何かを頼る<sup>15</sup>という頼る対象が別に想定されるから、明らかに表現価が異なる。「Bヲ頼る」が「BニCヲ頼る」と新たに対象Cが加わることによって、Bはヲ格からニ格へと格上げされる。いずれの場合も他動詞で、たとえ「Bヲ／Bニ」となつても、後者に「Cヲ」が想定できる以上、ゆれ現象とは考えにくい。ゆれの場合、いずれか一方が通時的に見て正用であるが、現在は他方も正用に準じて用いられている（その使用率の高低は別として）場合である。右の例で言えば「ををしくじる」「にに背く」「ににむちうつ」が本来であるが、他方も行われているのが実情で、ニ格のほうを自動詞と考えるなら、ゆれ現象によって生じた自他同形動詞ということになろう。

(3) 「AハBヲ<sup>16</sup>する」文型が「AハBが<sup>17</sup>する」の自動詞文型と表現的意味において差のない形、

電線に体が触れぬよう気をつけてください。

台風で裏の川は水位が増した。

は、動作や現象の主体の面で、特に意識に際立った違いを感じない。が、時として「～ヲする」形式にのみ強く動作主体を意識する場合がある。

自動車<sub>が</sub>泥をはねる／泥<sub>が</sub>はねる（「自動車は泥がはねる」とはならない。）

植木<sub>が</sub>根をはる／植木の根<sub>が</sub>はる（「植木は根がはる」は文意が異なる。）

「～ヲする」形式は「何が」という動作主体（A）を示さなければ文意が不十分であるが、「～ガする」形式は現象主体（B）のみで十分で、Aは想定できぬか、想定すると表現的意味が違ってしまふ。これは同じ自他同形動詞でも自他で表現価が異なる。右の二例は非意志性の動作主（自動車と植木）であるため、泥のはねたり根のはたりする現象が、ヲ格・ガ格いずれを取っても「あるがままの自然の事柄」として、特に語彙的意味にまでその差が影響していない。

(4)動作主（A）が想定されれば、「Bガする」の現象主体「B」はヲ格の目的語に格下げされて、「AガBヲする」となるのは(3)と同様であるが、このAが意志性のヒト名詞である場合には、通常「～ヲする」は意志的行為、「～ガする」はその結果としての状況（非意志的現象）となる。これは自他異形の動詞ペアで普通に見られる語彙の使い分けで、

医者が病気を治す／病気が治る

つまり、病気を治したこと即、病気が治ったこと」という図式を描く。これは最も典型的な動詞自他の表現的意味の対応である(4)。

ところで、この対応を同一形態で行う一群の動詞がある。

仲人が話を運ぶ／話が運ぶ

武者が馬を馳せる／馬が馳せる

暑いので胸をはだける／胸がはだける

店員が計算をまちがう／計算がまちがう

敵が軍勢を繰り出す／軍勢が繰り出す

もちろん「馬」のように、特に誰かが馬を馳せなくとも馬自身<sub>が</sub>勝手にひとり<sub>で</sub>馳せている場合もあり得るわけで、その意味では他動詞文と自動詞文とは必ずしも運動しているわけではない。いずれにしろ、これらの自他同形動詞は語彙的意味は自他共通で、表現的意味に差のある例と言えよう。

(5)馬を馳せたり軍勢を繰り出した<sub>り</sub>することは他者Aの意志による行為ではあるが、現実<sub>に</sub>馳せまた繰り出して行く行為<sub>は</sub>主体はBの馬や軍勢<sub>に</sub>ほかならない。その意味でAの行為は使役行為にすぎず、Bこそが現実の行為<sub>は</sub>主体なのである。ところが、

父親が子供を怒鳴る／子供が怒鳴る

では、上段の他動詞文型は、Bの「子供」は被動作者（行為の単なる受け手・対象）にすぎず、自身は何一つ行為を行っていない。一方、下段の自動詞文型は、「子供」こそ怒鳴る行為の主体で、明らかに他動詞文とは「文の意味」（叙述内容）が異なる。「怒鳴る」の語彙的意味は同じでも、怒鳴る主体に相違が生ずる。そのため

「怒鳴る」の「大声で叫ぶ」という語彙の意味に加えて、他動詞文では「他者に対して大声で叫ぶ」つまり「声高く叱りつける」という表現の意味が伴ってくる。文型による「格」の相違が述語の動詞を支配しているというわけだが、見方を変えれば、他動詞文はA側からの方向性、自動詞文はB側からの方向性と解することもできる。

「ヒ」の音を濁る／「ヒ」の音が濁る

顕微鏡をのぞく／下着がのぞく

預けた物を引き上げる／外国から引き上げる

風を吹きつける／風が吹きつける

風を吹き込む／風が吹き込む

後の二例は「く」に吹きつける／くから吹きつける」と、明らかに逆方向の格助詞の使い分けを行っている。

(6)基本的な動作・行為の在り方は共通だが、現実の状況において特に対象を要しない主体自体の運動と、もっぱら対象へと向けられた運動との差が、結果として目的語の有無を左右する一群の動詞がある。「折り返す」は「一定の箇所を逆方向へと方向転換をする」ことである。それが動作主自身の行為であれば「パスは終点で折り返す」と自動詞に、折り返すべき対象が設定されれば他動行為として「終点でパスを折り返す」「ズボンの裾を折り返す」と他動詞になる。自他を分ける要因は、その行為が自身のことか対象へなのかの違いではない。語彙の意味の大枠に差はない。

義太夫を唸る／苦しそうに唸る

櫓を組む／親友と組む

火薬を詰める／奥に詰める

水たまりに足を突っ込む／敵中に突っ込む

馬を控えて待つ／後ろに控える

台風が猛威をふるう／国力がふるう

動作・行為の主体や対象が何であるか、言い換えれば、その動詞と結合する名詞の意味特性(意義素性)によって動詞の意味は規制されるが、それは文脈の意味であって、語彙の意味の基本的ところは変わらぬと見る。「組む」が「親友」(ヒト名詞)と結合するからヒト対ヒトの関係で「コンビになる」の共同ペアを意味するのであり、「櫓を組む」が「組み立てる」を意味するのは「構築物」だからにすぎない。モノ対モノの関係「紐を組む」(組み紐を作る)は、複数本の紐を一つに絡み合わせる行為で、仲間と組んだり相撲で四つに組んだりするヒト対ヒトの「組む」と「複数のものが絡んで結び合わさる」点では大差はない。

(7)「さす」が「差す、指す、射す、刺す、挿す、注す、点す」とその個別的意味によってさまざまな表記を取ったとしても(常用漢字では「差、指、刺」のみ)、基本的意味は「異なる他の領域に向けて真っ直ぐ向かって行く」ことである。それが自然現象なら、「日が差す」「潮が差す」であり、意志的行為なら「刀を差す」「水を差す」であって、自他同形の動詞として働く。これらは意志と非意志、つまり行為と現象、人為と自然の違い、ガ格に立つ名詞で言うならヒト名詞と自然に生ずるモノ名詞との差である。

(生徒が)綱を引く／潮が引く



他動詞「引く」は「引く張る」「引き寄せる」、自動詞は「ひきさがる」の自動現象となる。この種の同形動詞を次に挙げておく。

車から荷をおろす／山からおろす風

鍵をさし込む／日がさし込む

教えを垂れる／水が垂れる

身を引く／潮が引く

身を寄せる／潮が寄せる

抽象名詞も現れる。この場合、述語動詞は極めて比喩的な意味として働く。

責任を負う／先人の努力に負う

返事を洩る／筆が洩る

返済を迫る／期日が迫る

悪事を働く／知恵が働く

(8)和語動詞は多義化する傾向が強く、新しい意味を派生することと次第に基本義から遠ざかっていく。もちろん出発点は同じ基本義から出ているのであるから意味領域の大枠においては共通性を持つこと言うまでもない。たとえば「おくる」は「去って行くものとの別れを惜しんで後からついて行く」という基本義（人を送る）の「送る」から、「去り難く（自分の代わりに）物をその相手へと届ける」意（物を送る／贈る）へと転じ、去っていく対象として「時」を考慮ることによって「時の経過を見送る」「つまり「去り難い気持ちであるひとときを過ごす」の意を派生させる。このように送る対象がヒト名詞からモノ名詞へ、さらにトキ名詞へと

転ずると、

客を送る／荷物を送る／花を贈る／一か月を送る

と、ヲ格に立つ名詞の指示内容によって「おくる」の意味も少しずつ動いていく。が、基本の意味は共通と見ていい。しかも、文法的意味の観点からは「トキ名詞」を送る」は極めて自動詞寄りの用法である。このように、ある任意の語の持つ個別の意味は、語源を共通にするかぎり、根に共通の側面を持つと考えられるが、派生の在り方や派生的意味の消長によって語義的に別語に近い隔たりとなってしまう例も無いことはない。しかも、語義の意味内容によって「対象」の設定を要せぬ場合は、おのずと自動詞として機能することになる。自他で語彙の意味に違いを生ずる例である。

窓をあける／夜があける

口をきく／薬がきく

冬を越す／隣町に越す

仕事をすする／胸騒ぎがする

辞書を備える／台風に備える

寄付を募る／暑さが募る

蚊帳をつる／足（の筋）がつる

「ハ」の字を濁る／水が濁る

チップをはずむ／息がはずむ

笛を吹く／風が吹く

穴をふさぐ／心がふさぐ

ご馳走を振舞う／わがまま勝手に振舞う

値段を負ける／敵に負ける

互いに相手を見合う／支出に見合う収入

わが子を見直す／景気が見直す

荷物を持つ／体が持つ

学校を休む／十時に休む

肺を病む／気に病む

卵を割る／千円の大台を割る

#### 四

以上のように見てくると、一口に自他同形動詞と言われるものも、自他双方の意味関係は決して一色ではなく、いくつかの段階に分かれている。一般に自他が対になる動詞は、

AガBヲ他動詞タ。ダカラ、Bガ自動詞タ

の対応の成立する場合と成立せぬ例とがある。

(例)車が土埃を立てた。だから土埃が立った(成立)

(例)大学を受けた。だから大学に受かった(不確定)

「土埃を立てた」ことは即ち「土埃が立った」ことであるが、

「大学を受けた」からといって「大学に受かる」とはかぎらない。

(例)は自他両文型が結果として表現的意味を共有し、(例)は共有の可否はその折の状況による。

(例)月が庭を照らした。だから月が照った(不成立)

(例)人夫が石を積んだ。だから石が積もった(非文)

右のうち、(例)は「月が庭を照らす」と「月が照る」とことは別箇の現象で、表現的意味を異にする。「だから」の順接関係

で連動しない(「庭が照った」とは言わない)。(例)は、「右」と「積む」とは共起するが、自動詞「積もる」とは結び付かない。表現的意味の面では対応関係にない別語と考えたい。

さて、このように自他の対を、それを述語とする文の表現的意味の面から四類に分け、この分類の観点から前章の八種の自他同形動詞の意味パターンを整理すると、次のようになるであろう。

(1) 自他両文型が同じ表現的意味のグループ

……「つまり」の関係(ア)

子供を授かった／子供が授かった

(2) 同じ表現的意味で、助詞のゆれと見るグループ

……「つまり」の関係(ア)

私は世を背いた／私は世に背いた

(3) 他動現象の結果が自動現象と同じと見るグループ

……「だから」の関係(ア)

自動車が泥をはねた／泥がはねた

(4) 他動行為の結果として自動現象が生ずると見るグループ

……「だから」の関係(ア)

敵が軍勢を繰り出した／敵の軍勢が繰り出した

(5) 自他両文型で動作主・現象主が入れ替わるグループ

……逆方向の行為や現象(ウ)

父親が息子を怒鳴る／息子が怒鳴る

(6) 両文型の使い分けが、対他者と自身の行為との差であるグループ

……無関係の行為(ウ)

家来が馬を控えて待つ／家来が後ろに控えて待つ

(7) 自他の動作主が有情者・非情物の差であるグループ

……無関係の事柄(エ)

不良少年が悪事を働く／知恵が働く

(8) 自他で語彙の意味が異なるグループ

……無関係の事柄(エ)

値段を負ける／敵に負ける

右の「値段を負ける」は「値段が負かる」と、「敵に負ける」

は「敵を負かす」と対応する。自他の対応相手を異にグループである。<sup>(6)</sup>

## 五

以上、自他同形動詞と言われる語を、和語に限って、その対応の在り方を文義論的見地から分類検討してきた。そして、自他の対応を形式的な文法上の対応と見ず、意味論的視野において分析するには「表現的意味」の観点を新たに設定することが有効であることを説いた。そこから、同じ自他同形動詞にもその対応関係に段階のあることが導かれる。また、他動詞文と自動詞文とを直列することで連文論の問題として分析の道が開かれ、その分析過

程においても表現的意味の観点が重要な役割を果たすことを証明した。新たな日本語学の拠り所として提唱したい。

注(1) 国広哲弥「自動詞と他動詞」(月刊言語「一八巻九号」)では、「越える／越す」を自他の中間的位置にあるとなす。

(2) 天野みどり「状態変化主体の他動詞文」(国語学「一五一集」)がこの問題を扱っている。

(3) 国立国語研究所「動詞・形容詞問題語用例集」(秀英出版)に「自動詞か他動詞か決めにくい語の用例」(宮島達夫担当)として取り上げられ、また、島田昌彦「国語における自動詞と他動詞」(明治書院)にも「活用が同じで、自動詞にも他動詞にも用いられるもの」として挙げられている。

(4) 森田良行「自動詞と他動詞」(国文法講座6「明治書院」)参照

(5) 森田良行「電話を掛けようとしたが、掛からなかった」(誤用文の分析と研究「明治書院」)および、宮島達夫「ドアをあけたが、あ

かなかつた——動詞の意味における〈結果性〉——」(計量国語学「一四巻八号」)

(6) 水谷静夫「現代語動詞の所謂自他の派生対立」(「計量国語学」一三巻五号)、同「和語と漢語の造語力」(文化庁ことはシリーズ8「和語漢語」)に詳しい。